・ 親子の文化の違いが一番問題だと思うんですね。
・一応計画は、ちょっと早めに帰っちゃうというんですけど、どうなるかわからないじゃないですか。その時（親の意見より自分が大事と言う時）が来るとどうしようとお父さんと言っているんです。
・ちょっと恐いのが、私も日本で生活したけどそういうのは感じられなかったんだけど、子どもが韓国の子どもだから日本で差別とかされることもあると思うんですよ。韓国人ということで、差別された時、その時にはどうしようかなって思うときがあります。よく乗り越えて欲しい。

子育て観の違い

子育て観の違いを感じている。自分は韓国の文化しかわからないが、夫が滞日期間も長く考えも広いので、夫に相談する。子どもにとっては日本にいるのだから日本に慣れた方が楽だろうと思うこともあるが、それでも時には韓国の方を通すこともある。

・私は１つしかわからないですから、お父さんの方に聞くと、お父さんの方が考え方が広いみたいなんですよ。
・今は日本にいるから、少しこっちの方に慣れていくと子どもの方が楽だから、無理矢理（韓国風に）させると悪いんじゃないかなと思うんだけど、たまたまに言わなきゃとそういう（こともあります）。

子育て方法の違い

日本と韓国の子育て方法の違いはわからない。自分は韓国にいた頃の子育てをそのまま継続している。日本に来た頃、保育園でも韓国の様にしたかった部分もあるが、今は慣れて気にしなくなった。

・やっぱり日本の子育てはよくわからないですから、私は（韓国の子育て）そのままでやるんですけども。
・私も最初はびっくりしました。韓国ではみんな靴下はきますから。今は慣れて関係ないんだけど。
・子どもに弟の責任をとらせるんですよ、私の方は。弟を守ってあげなきゃと良く言っちゃうんですよ。
・（上の子は）得するんだけど、兄弟の責任をとって下の子たちを守るっていうのがあるから、私も言っちゃうんですね。

子育ての経験

来日間もない頃、子どもが日本と韓国の違いに困惑しカルチャーショックを受けたことや、その時上手く説明できなかったこと、保育園に行きたがらなかったこと等が辛い経験として残っている。自分も日本の習慣に驚いたが、現在は慣れている。自分の母親からのしつけが、自分の子育てにも影響し、子どももその様に育っていることについては、頼もしく思っている。

・（子どもから、韓国と日本の違いを）聞いてそれが説明できなかったんですよ。日本ではそうなんだよって言えなかったんですね。
・私もお母さんからずっと（兄弟を守ることや上の兄・姉を敬うこと）教えてもらったんですよ、大きくなるまで。私は言おうとしなかったんだけど、やっぱりするんです。
・ここでは靴下あんまりはかないですね。韓国では靴下はいてやるんですよ。「なんでみんな靴下はかないの？」って（言っていました）。子どもは好き嫌いがはっきりあります。ちゃんと靴下しないとイヤだって言っていました。それで保育園行きたくないっていうくらい。
・（きょうだいで）２人きりで喧嘩ばっかりなんだけど、ちょこっと見たら、他の友だちから弟が殴られたりすると、今度は（兄の）○○が、殴られてなくてもおもちゃとかあげないと、○○がぱーっと出て来てすごいですよ。そういうのがあるん
ですよ。
・子どもにとってはカルチャーショックで、子どもはストレスは貯まっていました。

育児情報

育児の情報は、韓国にいる母親に電話で聞いたり、自分の店に来る韓国人の友人に相談したりする。
保育園には子どものお迎えに行くときしかチャンスがないが、時間がないので相談できない。

・やっぱり韓国にいる私のお母さんから聞くことが多いですね。電話とかで聞きます。
・（子どものことで何か）悪いなと思ったら、保育園の先生に聞くことは仕事が忙しくてなかなかできないので、よくお店に韓国のおかあさん達が来るんですよ。その時に聞いたりします。良いですよ、ほんとに。

ネットワーク

韓国人の友人がおり、相談できる。保育園とは子どものお迎えの時くらいしか時間がないが、不自由さは感じていない。

・（子どものことで何か）悪いなと思ったら、保育園の先生に聞くことは仕事が忙しくてなかなかできないので、よくお店に韓国のおかあさん達が来るんですよ。その時に聞いたりします。良いですよ、ほんとに。

文化や習慣

文化や習慣、言葉が違うことには慣れた。自分は韓国しか知らないが、夫が両方知っているので、相談し頼りにしている。
韓国は家族のつながりが強く、親の意見が子どもの意見よりも優先される。将来子どもが日本の文化や習慣になれ、自分の意

見を親の意見より優先させるようになってしまったらと心配している。

・文化や習慣、言葉が違うことについては、今は慣れたんですね。
・私は1つしかわからないですから、お父さんの方に聞くと、お父さんの方が考え方が広いみたいなんですよ。
・やっぱり私は韓国の方が家族とか親戚とか周りのつながりが強いと思うんですね。
・大人になって、大人にならなくてもちょっと大きくなったら、自分の意見が誰よりも一番重要だと思うときになっちゃうと、お父さんと私はちょっとおかしくなるかなと。
・一応計画は、ちょっと早めに（韓国に）帰っちゃうというんですけど、どうなるかわからないじゃないですか。その時（親の意見より自分が大事と言う時）が来るとどうしようとお父さんと言っているんです。

子どものアイデンティティ

日本に来日後、子どもが活発になり、表情が豊かになって自分の言いたいことを話すようになり喜んでいる。
子どもは来日後、保育園に行きたくない程カルチャーショックを受け、ストレスが貯まっていた。そのときは両親も心配していた。
両親は、韓国語を忘れないように日本語を教えていなかったが、子どもが困るので、強くは思えなくなった。子どもが韓国語を忘れないように絶対に自宅では韓国語を話しているが、この方法で良いのか気になっている。今は日本語が上手になってしまった。
韓国人であることを忘れないで欲しいが、日本のこと、環境や文化なども好きになって身につけて欲しい、日本人、韓国人というよりも、自分らしく堂々と生きていって欲しいと思っている。
保育園で色々な国の人とであうことで、自分とは異なる文化やルーツを持った人に対して、怖さや抵抗がなくなり、同じ人間だと思えることをうれしく思っている。

・子どもが前より全然違ったというか、全然言うこと聞かないし、活発というか、身体が足りないくらい。（うれしそうに）
・自分の言いたいことを話すようになりました。それはすごいありがたい。
・（子どもから、韓国と日本の違いを）聞いてそれが説明できなかったんですよ。日本ではそうなんだよって言えなかったんですね。
・最初から日本語教えて挙げていたらやばいと思っているんですよ、お父さんの方はすぐ韓国語忘れるから。どうせずっと日本に住むわけじゃないから、それでも日本語わからないと子どもが困るから、今度は。
・家に帰ってきたら、絶対韓国語を使いなさいと言っているんですよ、お父さんの方は。
・でもあの子は帰ってきても（日本語が）ずっと続くんですね。だから、たまたま日本語でしゃべっちゃうんですよ。
・今はもう私たちより日本語沢山しゃべるようになりました。
・日本人みたいな韓国人じゃなくて、韓国人みたいな日本で育った子じゃなくて、自分の堂々で、恥ずかしいものじゃなくて、なんていいますか？
・私は韓国人だよじゃなくて、日本人だよじゃなくて。自分は自分らしく生きてほしい。
・お父さんとお母さんの方は、韓国人を忘れないで欲しいですけど。
・日本のことについても、みんなを全部、環境とか教育とか、日本の文化も全部好きになって欲しい。身につけて欲しい。
・私としては欧米人を見ると恐いです。映画では平気だけど実際見ると目が青とか金髪とか恐いんです。でも子どもの時からずっと仲良く遊んだらそういう面がなくなっちゃうと思うんですね。だからいいなと思うんです。みんな同じ人間だから・・で。
・韓国ではみんな韓国人で、他の人を見ると珍しいように見るんですよ。なんか違う、何回も言っているんですよ。
でもここでは普通で見るじゃないですか。それで最初はびっくりしたみたいなんですよ、あんまり見たことがないから。
今では普通になって、それで良かった。

自分のアイデンティティ

両親とも韓国人としてのアイデンティティをもち、子どもにも忘れないで欲しいと思っている。

・お父さんとお母さんの方は、韓国人を忘れないで欲しいですけれども。

保育園の関わり

保育園については、もともとどういう保育園か知っており、言語の問題や文化の問題を考え入園を希望した。保育園で自然と多く触れあうようにしていること、自分のことを自分でできるようにしていることを良いと思っている。保育士がひとりひとりの子どもを良く見ていて、親の知らない子どものことを、お帳面に書いてくれていることに感謝している。
保育士も周囲の子どもも、言葉ができないことを解ってくれるのではないかと期待していたが、その期待どおりになっており、話せない子どもがいても普通な感じがし、子ども同士で言葉を助けてくれるのもうれしく思っている。子ども自身が保育園での生活を楽しんでいることに安心している。民族の文化を大事にし、運動会でプンムルをしたことを良かったと思っている。
色々な子どもと友だちになり一緒に育つことが、自分の子どもにとっても自然なことになったと喜んでいる。

・保育園ではそんな時間がないんですよ。ぱっと来てぱっと帰っちゃうんですよ。
・本当は聴いてみたいんですけども、その時は忘れちゃうんですよ、早く帰らなきゃいけないと思うから。
・良いことは、ここ（保育園）でちゃんと自分で自分のものをやっちゃうんですね。結構自分のものを自分でやるんです。

それが助かるなと思うんですけど。
・楽しんでいるのは、ここを楽しんでるんですよ。
・最初は言葉の問題で。最初から希望しました。入ったらすごい良い。
・韓国で番組を見て、ここの教会の先生がテレビの番組に出て、７年前に日本に勉強しに来て、教会にも来て話をきいたりしました。また Z 市の方に来て、ここに入ったら良いなと強く望みました。
・言葉もできないのもわかってくれるんじゃないかなって、先生も子ども達も。
・日本の一般的な幼稚園だと厳しい、子どもとしては。韓国語もわかるはずじゃないし。
・話せない子どもがいても普通な感じがするんですよ。それでも通じるのが不思議なんですけど。
・この前の運動会で子どもがプンムルノリの一生懸命やっているのを見て、すごく良いなと思いました。
・韓国でも一生懸命教えてもらわないと難しいですね。ここでそれをやるのは気持ちいいなと思うくらいでした。すごい良かったと思いました。
・フィリピンとかブラジルの友だちも素直に思っちゃうんですよ。それがいいなと思います。
・韓国ではみんな韓国人で、他の人を見ると珍しいように見るんですよ。なんか違う、何回も何回も言っているんですよ、でもここでは普通で見るじゃないですか。それで最初はびっくりしたみたいなんですよ、あんまり見たことがないから。今では普通になって、それで良かった。
・韓国では（自分とは違う様子の人をみると）何回も大きい声で言っちゃうんですよ。どうしたの、どうしたの、とか。すると説明ができないんですよ。早く他の所へ行って言わないととか、あ、危ないとか思っちゃうんですよ。そういうことがあったんです。今はそういう人もいるんだよって自分で思うらしいんですね。それも良かったと思います。
・お帳面とか見ますと、詳しく書いてあることがあります。私の知らない子どもとか良く見るんですよ。
・先生達が詳しいことを見ないと書けないじゃないですか、１人１人をよく見て書いて下さっています。お父さんの方もびっくりしています。
・私としては欧米人を見ると恐いです。映画では平気だけど実際見ると目が青とか金髪とか恐いんです。でも子どもの時からずっと仲良く遊んだらそういう面がなくなっちゃうと思うんですね。だからいいなと思うんです。みんな同じ人間だから・・で。

家族の支援

自分たちの仕事の都合で来日し、子どもが文化や習慣、言語の違いに戸惑いカルチャーショックを受けていた時には、とても心配していた。夫は優しくとても頼りにしており、よく相談している。インタビューの様子からも信頼し、仲がよいことがうかがえる。子どもがハングルを忘れないようにして欲しいと願い、自宅ではハングルしか話さない。

・（子どもがカルチャーショックを受けていたとき）その時にはお父さんの方がもっと心配していました。
・お父さんはあんまり無理矢理教育させるなとします。成績が一番下でもいいから学校入る前にハングルとか教えてあげるなと言ってるんですよ。
・日本に来て違うと思った時や困った時は、やっぱりお父さんと相談しますね。
・お父さんの方が日本に７年くらい生活していますので、子育てとかは知らないんですけれども、日本の習慣とかは私より詳しいんですね、それで聞くんですけれども。
・私は１つしかわからないですから、お父さんの方に聞くと、お父さんの方が考え方が広いみたいなんですよ。
・それでも厳しいのは、家に帰ったら絶対韓国語を使いなさいと言ってるんですよ、お父さんの方は。

日本社会と外国人

外国人として、韓国人が良くないこともしているとは思っているが、「韓国人」という先入観や偏見ではなく、良いところや役に立つところも見て欲しいと思っている。日本で上手くやっていきたいと思っている。

・韓国人とか言わなきゃとか思うんですね。日本人じゃないから日本の国で住むのがちょっと大変と言うか、生活は困らないんだけど、意識としてですね、まだ。
・「韓国人がなんとかなんとか」とおっしゃっているんですよ。その時には感じるんですね。それがなくなるのは難しいんじゃないかなと思うんですけど、一緒に住むなら意識が軽くなるといいと。
・（韓国は）良くないこともあると思うんですよ。民族性というか、見ないうちに悪いこととかやっちゃうとかあるんですよ。ゴミとかみんな見ないから捨てちゃうとか、日本人もあると思うんですけど。
・日本の習慣とかに従って住むようにするんですね。
・役に立つようにするんです。それをわかってくれるといいなと思います。みんな同じじゃなくて。
・つながりをもってできるように、あんまり細目（偏った目）で見ないで、やっていけるなと考えてもらいたいですね。
・韓国人とか日本人とか関係で見てもらったらちょっと困るなと思うんで。「こんな良いこともある」って。それでやっていきたいと思うんです。

事例４の面接内容　　日本人、子ども２人（第１子が４歳）

子育て不安

子どもに対してイライラすることがあり、母親として不適格感を感じている。

・たまに私だめかなって思うこともあって。そんなときに他のお母さんに聞くと女同士はそうよって言ってくれた。言ってくれたっていうか、そこもそうみたいで、そんなもんだよって言われて。頭では解っているんだけど、態度が違うくなっちゃう。
・しょうがないかなって思うんだけど。悩んで落ち込んじゃったりね。言い過ぎたかなって思うことがある。
・自分に似ていると思うとね。同性だから余計そうなっちゃうのかな。

子育て観の違い

他国の母親と交流をもつことが少なく、子育て観の違いについては感じていない。「変わらないのではないか」と思っている。

・国的に違うことはあるんだろうね。こう韓国だったら韓国、日本だったら日本で。
・保育園で結構子どもとか他のお母さん達と話したりするけれど、子育てについてそんなに変わらないっていったら変だけど、（変わらない）じゃないかなあとは思う。
・たまたま自分の子のクラスに韓国のお母さんが多いからかもしれないし、子どもが仲良い子のお母さんと子どもを通じて話すのかなっていうのがある。
・子育てについて違いがあるのかどかは今一つわからないし、話す機会がない。

子育て方法の違い

子育て方法について、他国の母親と話すことがないので、違いはわからない。

・子育てについてはそんなに深く話したことはない。
・違うんだなって感じる感じないっていう以前に、話さないからなのかな、やっぱり。そういう話題にならないから。

子育ての経験

第１子がとても育てにくかった経験がある。母親として不適格感を感じたりするが、友人と同じ思いを共有できた経験ももっている。子どもがハングルを話してきたりすることを認めようと思っているが、余裕がないときは子どもにきつく当たってしまう。

・初めての子どもだったし。本当にこの子は育て難かった。
・たまに私だめかなって思うこともあって。そんなときに他のお母さんに聞くと女同士はそうよって言ってくれた。言ってくれたっていうか、そこもそうみたいで、そんなもんだよって言われて。頭では解っているんだけど、態度が違うくなっちゃう。
・韓国語とかでしゃべってくると、私にはわからないから、余裕のある時は何なの？って言うようにはしているんだけど、余裕のない時とか急いでいる時とか焦っている時は・・・そういう時は後になってしまったと思う時がある。

ネットワーク

韓国人の母親とは、あまり交流がない。保育園の交流会でも自然にグループが別れてしまう。
日本人の母親との交流があり、特に保育園でであった友人には、悩みを相談している。具体的に頼れる親などがいないので困る。

・日本のお母さんの方が、偏見とかじゃなくて話しやすい。
・会うとしたら子どもの送りとお迎えのときしかないし、行事の時とか、仲良いお母さんで固まっちゃうでしょ、そうしたら日本人は日本人同士じゃないけど、日本人の中でも仲良いお母さんで固まっちゃう。
・お母さん（日本人）と仲良くなれたことかな。それは大きい。この子のことで悩んでいた時だったから、親に向いていないんじゃないかって色々思っていた時だったから相談できるお母さんに保育園でであったから良かった。
・すんなり仲良くなったお母さんがいて、その人のお母さんのお陰でだいぶん助かったり相談できることが多いから、気分的に楽になったことが大きいかな。
・韓国のおかあさんたちともっと仲良くなってもいいんだろうけど。
・保育園が交流会とかやってくれるんだけど、自然に別れちゃうんだね。なんか、やっぱ・・・・
・親でも頼れればいいのにって思う。行き詰まっちゃう。

文化や習慣

異文化とよく言われるが、それ以前に日本文化も変わってきたと感じている。他の国のことはあまりわからない。自分達は多文化社会での教育を受けてきていない、また他国の人々と接する機会がなかったので、大人になって急には多文化を受け入れられないと感じている。

・子ども達をまじえて飲み会をやったとき、韓国のおかあさんとか日本のおかあさん入り交じっていたけど、その時は話さ

なかったね。
・異文化以前に日本の文化も変わってきているのかなという気がするから、どこの国がどうとか、あんまり（他の国のこと）わかんないしね、どこの国がっていうのが。
・自分たちがそう育ってきていないのもあると思う。こてこての日本人社会で育って来ちゃったし、今まで余所の国の人と接する機会がなくって、大人になってやってみろって言われてもできない。

子どものアイデンティティ

子どもが色々な文化を持った人と仲良く育つことは良いことだと思っている。

・子どもが色々な文化を持った人と育つのは、まぁいいことではあるんじゃないかな。
・いろんな文化を持った人と出会うのはきにしないかな。自分が仲良い友だちを見つけてきて、仲良いんだったら良いと思う。どこの国の子どもだろうが、仲良くすることに越したことはないから。楽しくやっていってくれればよいと思っている。

自分のアイデンティティ

日本人という意識はしない

・日本人って意識はあまりしない。

保育園の関わり

入園に際して、保育園の多文化保育のことを聞き悩んだが、夫と相談し、数年のことで良い経験だと考え入園させた。 入園後、お祈りやハングルを覚えてきたり、運動会で韓国の民族的なことをするなど、他の保育園で行わないことを経験し、抵抗感があり戸惑ったり、逆に貴重な経験だ考えたりする。 運動会については、民族の踊りを取り入れていたのでショックを受けた反面、写真を撮れてよかったと思ったり、複雑な思いがある。子ども競争をしない運動会については、自分たちのころと比較して保育方針の違いを感じ、日本の教育の変化も感じている。 色々な文化を習ったり、友だちができることについては良いと思っている。また、保育園で自分も友人ができ救われた思いがある。 自分が多文化教育を受けたわけでもなく、他国の人々と接した経験もないので、大人になって急には多文化を受け入れられないと感じている。 挨拶などの多文化保育は良いと思うが、教育などに色濃く取り入れられるのは困る。実際保育園では、１つの国のことだけでなく、様々な国のことを公平に取り組んでいるので、受け入れられる。

・担任の先生から「うちは他の保育園と違って、いろんな国の子ども達がいるし」って言われた時に１日くらいだけど悩んだ。
・文化的にはわるいことではないと思う。いろんな国の文化を習うっていうことはね。
・最初は抵抗感はあった。
・主人と話していたんだけど、やっぱり他の保育園を見に行ったわけじゃないけど、自分達が子どもの頃の運動会とかと比べてみて、違うと思う。
・この子の年代だからかもしれないし、この子の年代っていうのと多分、文化の保育方針の違いだと思う。
・今の保育園や小学校は争わないっていうんでしょ、順番もつけないとか…運動会って言うのはびりもいれば一等もいるっていう中で親は育ってきたので、最近の保育園、次の小学校も変わってきたのかなと思う。
・衣装着て踊ったりするのは、それは可愛かった。
・お母さん（日本人）と仲良くなれたことかな。それは大きい。
・その他にうれしかったことって、他の保育園より厳しくないところ。色々親身になってくれるから、家の事情とか。
・この保育園は他と違うことをやるから、えって戸惑うこと半分と、他ではやらなかったろうなっていうのが半分と・・・結構複雑だね。
・自分たちがそう育ってきていないのもあると思う。こてこての日本人社会で育って来ちゃったし、今まで余所の国の人と接する機会がなくって、大人になってやってみろって言われてもできない。
・保育園に行っていて、どこの国の子どもだろうが、仲よくすることに越したことはないから、楽しくやっていってくれれば良いと思っている。
・挨拶とかいろんな国の言葉をいっているからまあ良いかなあって。
・どっか１つの国の教育を徹底的にやっているわけじゃないから。それぞれ公平にやっているから、だったら良いかなって思う。

家族の支援

端々にお父さんと・・・・という言葉がでてくる。子育てについて、夫によく相談している。夫が夜勤の仕事なので、気を遣っている。頼れる親が近くにいないので困っている。

・おとうさんもお父さんで大変だろうけど、たまにお父さんはいいなって思っちゃう時がある。自分と違うから。会社で厳

しい思いをしているんだろうけど、男だったらなって思うときがある。
・主人と話していたんだけど、やっぱり他の保育園を見に行ったわけじゃないけど、自分達が子どもの頃の運動会とかと比べてみて、違うよ、みたいな。
・親でも頼れればいいのにって思う。行き詰まっちゃう。

日本社会と行政

子どもを育てながら働くことの困難さから、生活や将来の行き詰まりや不安を抱えている。行政に対する不満はあるが、あきらめている。

・行政はひどすぎるよね。保育園の問題にしたって、ちょっと今の市長さんどうにかしてくれないと、働きにくい。
・おばあちゃんかおじいちゃんがみてくれる環境じゃないと無理だよって言われて。
・働き口を数打てばあたるのかもしれないけど、選ばなければあるのかもしれないけど、なかなか厳しいんだって、特に核家族っていうのは。そうすると誰か第３者の人を頼らなきゃいけなくなっちゃうし、そうなるとお金の問題がある。
・所得で保育料が決まるから、働けば働くほど保育料が高くなるんだよね。何のために働くのかっていうと家計が厳しいから働くんだけども、所得があがれば保育料っていうのも上がっていくし、何なんだろうって思う。預けにくい、働きにくい。
・社会や行政の望むことっていっぱいあるけど、改善しないよね。
・女の人が安心して子どもを育てながら働ける環境ではないよ、絶対。でも産むじゃない？みんなどうしているんだろう。働きたいけどね。
・親でも頼れればいいのにって思う。行き詰まっちゃう。

保育士（A氏）の面接内容　　日本人、S保育園での保育歴20年

S保育園の基本理念

もともとS保育園の発足が「２つの文化」だったとはいえ、保護者や子ども達の事情と向き合い１人１人に向かい合い共感して対応していくことが保育園の基本理念であり、どの保育園でも展開できることで、特別なことではないと考えている。
特別な研修を受けているわけではなく、自分たちに無い文化や言語を保護者から教えてもらい、保育園の「宝物」にしている。
保育士が何とかして保護者とコミュニケーションをとろうとしている努力を誇りに思っている。
子ども達には、保育園での経験が将来の子ども達の経験や人格形成に繋がって欲しいと願っている。
S保育園での保育活動を他の保育園や地域にも広げていく役割を担っていると考えている。

・ひとりひとりを見つめていって、ひとりひとりと相対していった中で、じゃあこんなことやってみよう、こんな歌を歌ってみようとかこんなゲームをしてみようとやっていったら、どこにでも展開できることだし、どこにでも大事にされなければならない文化だと思うので、全然特別なことだと思わないし、とても簡単なことだし、保育の基本だと思う。
・保護者はたくさん困ったことがあるかもしれない。・・・いろんな考え方があって、いろんな生活があるなかで、親の生活を知った上で、何ができるかを考えてあげるのが、一緒に子どもを育てることだと思う。
・生活の方も多様化していて、本当に仕事を休めない・・基本的に保護者とどう向き合っていくかが大事になってくると思う。
・私達が当たり前と思うことが当たり前じゃ無い。すごく特別視されるし、でも特別では無いと思う。
・たまたまその中に、日本と違う文化をもってる人たちがいるだけだと思う。もともとここの保育園の出発点が２つの文化だったので、もともとの土台はあったと思う。でも始めてみれば、そんなに特別なことではないと思う。
・私達が特別な研修を受けてエキスパートになってやっているわけではない。自分達に無いものは無いものなんです。文化はないから。自分達になかった文化、自分達になかった言葉の文化をどこから仕入れるかっていったら、保護者から教えてもらうことで、私達になかったものが、ひとつふたつ宝物になって繋がっていくだけの話しなんですね。
・特別何かあるわけじゃない。自分達で本当に日常の中でできることしかやっていない。
・私達は、これからは発信していかなきゃいけないかなって。当たり前のことだったから、そんなに難しいことじゃないと思うんだけど、これだけ広がらないんだから、発信はしていかないといけないかなって思うんですね。
・今、友だちと過ごすことの楽しさと痛みをわかることをいっぱいいっぱい共感しておいて、だんだん大きくなっていく時に、ここでの思いとかがその子のなかに生きて「あのときこうだった」ってことが活かされていったらすごく良いと思う。そんなことを大事にしています。
・多文化共生保育の中で理想的に育っているわけではない。みんなどこでも同じ現場が展開されているだけ。桃源郷ではない。向かい合える気持ちと共感する気持ちがあれば、信頼が築いていける。

保育士として大事にしていること

「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」という言葉のように、ひとりひとりを大事に向かい合っていきたいと考えており、それが多文化の中で生きていく基本であり、保育の基本だと思っている。そのためには、自分のことを良く知り、自分にも誇りをもっていなくてはならないと考えている。

・大事にしたいなと思っているのは、どの民族だから、例えば韓国人だからここを大事にしなきゃいけないとか、ペルー人だからここを大事にしなきゃいけないとか、そういうことは細かいところでは色々あると思うんだけど、私はひとりひとりを大事に捉えていくことが一番の基本だと思う。
・長い間この保育園に勤務していて「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」という言葉が全ての基本なのかなって思う。
・自分をしっかりもって、自分のことを知って自分のことを誇りをもてなければ、相手の誇りなんて大事にできないし、相手をしっかり受け止めていくことなんてできないし、自分を受け止めることをできない者が、相手を受け止めることはできないなって、主体が自分に変わって来て、自分をよく知って、自分が誇りをもつことが大切だと思って来た。
・自分に対してもそうだし、大事にしていることは、相手に対しても同じだと思う。
・ようするに、ひとりひとりを大事にしていくことだと思うし、ひとりひとりと向かい合っていくことだと思う。

子ども達の将来への願い

子ども達には、自分のことも友だちのことも大事に思える子どもに育ってもらいたい。共感するこころがある子どもになってほしいと考えている。
将来思春期など反抗期を迎えたときに、親や文化を否定してしまうかもしれないが、その時に子ども達の力になれるよう、子ども達には大切にされた経験をしてもらいたいと願っており、保育士としての役割を感じている。

・自分を大事にしてほしいし、命も含めて心も含めて自分を大事にできる子どもになって、隣にいる友だちのこころも解って、共感できる子どもになってほしい。国籍とかじゃなくて、全部含めて。ありのままを。その子がもし隠しているのであれば、隠しているのがありのままじゃなくて、隠さなくてはならない真実が痛かったってこと。痛いってことを感じる心をもってて欲しい。
・子どもは１人１人自分で子どもと友だちと出会っていくと思うので、そういう場にあっても感じられる子ども、痛みを感じられる子どもになって欲しい。もしその子が知らん顔してたり、友だちが知らん顔して「自分はへっちゃらだよ、自分は強いよ」って言っていても、気が付いてあげられる子どもになってほしい。
・園長なんかは、思春期とかすごく起こるって言っていました。親を疎ましく思う、そういう時が必ず来る。期間的にも反抗期は起こるけれども、下手にそういう親のことが強くあると、言葉を持たないにしても、親や文化を否定してしまったり断ってしまいたいと。そういう時何が力になるかっていうと、どれだけよい思い出を持っているかだそうです。みんなの中で言葉が大事にされたり、文化を大事にされたりするとそのことが力になっていく。自分達のそういうことが繋がっていくんだなって思います。

多文化保育の実績

Ｓ保育園の多文化保育が周囲に広がった経験や自分も周囲に多文化保育を広げた経験があり、うれしく思っている。
保育園の中でも、保育士と子どもが一緒に母親の生徒になり歌や料理を教わって、子どもが母語を話すように変ったという経験がある。

・例えば、肉マンがＳのバザーででたのは、ここにいた台湾のお母さんの手作りを売ってくれて、すごく好評だったのね。それを給食分科会があったときに、紹介したら、次の年から公立で肉マンがメニューに入ったの。それはＳがやってきたことだし。もともとは保護者との１人１人のかかわりの中で生まれてきたことだし、特別なことではないし、すごくうれしいこと。
・自分はポルトガル語もしらないし、ブラジルのことも何もしらない。必死になって、ママに来てもらって、歌を歌ったりお料理を一緒に作ったりする時間を作った。週１回とか２週間に１回とか。ママに来てもらった時、その悩みを初めて聞いて、なすすべがなかった。でもそうやって自分がママから聞く、自分が生徒になる、子どもと一緒に生徒になる。子どももママから教わって、一緒になって生徒になっていく過程で、子どもが変わっていった。日本語しか話さなかった子が「私のママに教わった歌なんだよ」って・・・それが感激して、やっぱり子どもは感じ取る。

具体的支援

特に来日直後の保護者には、母語で挨拶することが望ましい。園からの連絡などは、すべて母語で作ることが望ましいが、困難なことも多い。信頼関係を築き、わからないことを当たり前に聞いてもらえる関係が必要である。
文化や習慣の違いがあり、運動会や保護者のサマーパーティなど行事などの主旨が伝わりにくいこともある。それには母語での説明が必要。挨拶ひとつでも大事にされていれば、その言葉や文化をもっている親が子どもにとって誇りになる。保育園では日本語が多いので、自宅では母語で話すことを自信をもって勧めている。
日本人と外国人の保護者の交流は難しい。
生活が安定しないと、子育てのことを一緒に考える段階まで進めないので、保育園としてもできる限りのことをしている。
子ども達が自分らしく生きていけるように、それぞれの文化や歌、絵本、料理などを保育士も生徒となって一緒にやっていた。
親にとっては、自分が伝えた歌や料理を子ども達が喜んでくれたらうれしい。そういう場を大切にしたいと考えている。
お帳面は、母語で項目が書いてあり保護者も母語で書ける。また、担任とのやりとりもできるので好評である。本名で名乗ったり、自分の名前が書いてあることについては、特別な意識がないので、親が喜んでいるかはわからない。

・「このお母さんには、この言葉で言ってあげるとうれしいな」とか、まだ渡ってきたばかりの人には母語で挨拶してあげ

た方が絶対うれしいと思う。

・入園してすぐ書いてもらう両親の情報や保険証などのシートについては、説明し難い、でもすぐ欲しい情報なので、前はひらがなで書いて出していた。でもそれでもわからない。全部母語にしてしまわないと難しい。
・だからうちでは易しい言葉を使って、・・・母語で書いてあげないとわからない。保護者との信頼関係が築いていると「先生これ何て書いてあるの？」って聞いてやっていけるので、なるべく早くそういう関係になれるように、そういうことが当たり前にできる関係をつくっていくことが第1段階。
・やっぱり一番良いのは全部母語で訳してあげることだと思う。例えば、なんで一緒にやるのかっていう精神論は難しいから、身ぶり手ぶりでは通じないので、私達が何を大事にしたいのか、最低限のことを訳してもらった。
・保護者の会の活動の中でかなり密ですね。外国人のお母さんと日本人のお母さんの交流は、かなり難しい。
・子育て不安以前の問題、生きるっていうことに関して整備されないと、子育てのことを一緒に考えましょうっていうところでは難しい面がある。
・挨拶一個だけでも全然違うと思う。それが大事にされるところか大事にされないところかっていうのが子どもにとって大きい。大事にされるのであれば、その言葉や文化をもっているお父さんお母さんが誇りになるんだけれども、大事にされないって感じてしまうと、反発すると思うんですよね。
・今は自信をもって「絶対母語大事にして」言えます。絶対諦めて日本語で話すんじゃなくって、せめてお家では母語を大事にする環境をつくっていったらいいって言える。
・私達保育士が子どもの母語で話そうと思ったら、本当に下手くそで聞いちゃいられない母語になっちゃうから、それよりは本当にきれいな正しい母語で話してほしい。そのかわり私達は圧倒的多数で日本語でしか話し掛けられないから、いやでも日本語は耳に入ってくるから、そんなことしなくていいって言ってるの。もう自信もてる。だって、ここでどんなにしたって、小学校に行ったら、母語に触れ合えるなんて無い。小さいうちに、親が大事にしているものを、わかってもわからなくても、諦めないで語ってあげることが大事。
・日本に慣れるしかないって思っちゃうみたい。慣れるのも必要なのかもしれないけど、自分のものを押し込めちゃう必要はないし、自分のものを広げながら、私達が慣れる助けをしたらいいと思うし。
・お帳面かな。ひとりひとりを観ていくって、ずっとそのことを大事にしているので。自分の母語で書ければ一番良いんだけど、母語で書けないけれども、なんとかハングルだったら書いて来て良いよ。ポルトガル語も大丈夫、スペイン語も大丈夫。誰かが読める。お母さんが自分の母語で書けるっていうのも良いと思う。
・お帳面見たら担任の先生が書いてきてくれて、自分の悩みにも答えてくれてっていう感じにできるので、お帳面はこれからも大事にしていきたい。
・本名で名乗ったり、自分の名前が書いてあるっていうのは、わからないなあ。喜んでくれているのかもしれないけど、他と比べたことがないし、そんなに特別なことをしている意識がないからわからない。
・自分の知っている曲、自分が伝えた曲を子どもが歌ってくれていたら嬉しいと思う。自分が教えた料理、自分が一緒に作った料理を子どもが味わってくれていたらうれしいよね、そう言う場は大事にしたいと思っている。教えてもらった物を分かち合う場を大事にしたいと思っている。そのことは喜びになっているかな。

外国人と日本人の育児不安の違い

育児不安については、一人一人に対応しているので、国籍などグループ化して考えていない。 外国人は、日本人が思わないような不安がある。本名を名乗らず日本風の名前を名乗らなくてはいけない、日本語で話さなくてはならない、日本に慣れなくてはいけないという意識など。子育て以前に生活不安も大きい。 子どもが日本に慣れてしまうと日本語しか話さなくなるという言葉の問題もある。子どもは、母語が大事にされていないと、その言葉や文化をもっている親を誇りに思えず反発してしまう。 子どもが小さければ、日本人も外国人も「食べない」など悩みは似ており、反抗期も同じ時期にやってくる。外国人の場合は、言葉がでてくるのが「遅い」という心配がある。

・あんまり、グループ化して考えなかった。対一人一人でやっていく、話をしたりとかするじゃない？じゃあ韓国人は？ペルー人は？っていうことがわかりずらい。もしかしたら大きく違うかもしれないけど、あまりにも個別でいっぱい話をしているので。
・来日当初とか、日本人が思わないような不安があるとは思います。
・一番最初に来た時に、園長、副園長と会う時に、一番最初書いてくる書類には日本名が書いてあったりとか、本当に日本風の名前しか書いてない。日本の名前であるはずがないじゃない？という子どもまで日本風の名前で書いてくる。「どうして？」って聞くと、日本風の名前でないといけないって浸透している。
・保育園に入るって、一番最初の社会の入り口だと思う。保育園に入る情報を持っている人って、まだ「情報を持っている方」だと思う。保育園に入ることすら知らない人も沢山いるので、保育園に入るって情報を持っている人って、かなり日本でもまだ情報を持っている方だといえる。だから助け合えたか相談に行ったかで。そういう人でさえ、いいですよって名前の話からしていって。「できれば御自分の母国語の表記で、ローマ字表記しましょうか？」っていうと、驚かれて。そこからスタートですね。
・日本風の名前でないといけないとか、どうしてそんな風になってしまうのかな？一歩外にでて学校にいくときは、日本風

の名前とか。長く居ても、いざ学校に行こうとした時にも悩んだり困ったり迷ったり・・・あるんですよね。
・外国人と日本人の不安は違うと思う。元々心配するものが違う。日本人が不安に思わないことを不安に思いますよね。
・子育て不安以前の問題、生きるっていうことに関して整備されないと、子育てのことを一緒に考えましょうっていうところでは難しい面がある。
・親と子の言葉の違いあるっていう声は聞きます。日本語しか答えてくれないとか。
・一刻も早く日本語に慣らさなきゃっていって、日本語で話すおかあさんもいる。なるべく日本語で話すようにします。でも自分の日本語が下手だからって。日本に慣れるしかないって思っちゃうみたい。
・子どもが小さければ小さい程、（日本人でも外国人でも）悩みは一緒なのかもしれないね。「食べない」とか「飲まない」とか「いうことときかない」とか。反抗期とかもだいたい同じ時期だし「いやいやって困っちゃう」って共通している。言葉がでてくる時期に、遅いとか心配がある。
・挨拶一個だけでも全然違うと思う。それが大事にされるところか大事にされないところかっていうのが子どもにとって大きい。大事にされるのであれば、その言葉や文化をもっているお父さんお母さんが誇りになるんだけれども、大事にされないって感じてしまうと、反発すると思うんですよね。

多文化共生社会と保育

S保育園が、民族のことを取りあげて特別なことをやっていると思われていることや、他の保育園や社会が外国人に対して「慣れて下さい」という考え方をもっていることに対して、改善すべきたど考えている。

・他の保育園から見たら、すごく特別なこと「民族文化のことを取り上げて、すごく特別なことをやっている」様に見えるんだけども。
・他の保育園は全然違うみたい。どうしてそんなに違うのかなって思うくらい凄く違う。元々保護者と相対する向き会い方が違うかもしれない。
・ちょっとづつ、２０年前に比べて十年前、十年前に比べて今っていう感じで、やろうとしている保育園は出てきましたね。

行政や社会への要望

外国人の立場にもたって、どういう助けが必要か、どのような団体が活動しているかなど、地域の情報収集をし、困ったときに助けになる行政であってもらいたいと思っている。 公的な機関は外国人にとって抵抗感が強く、保育園が助けになっている場合もある。

・もっと情報収集するべきだし、もっともっと利用する側にたって、やさしくなってほしい。おかあさんたちがつらい思いをしている。
・行政には、ちゃんと助けるネットワークに入ってほしい。地域の情報収集して、間口を広げられるように、困った時に本当にかけ込めるようなところになって欲しい。知られたらまずい情報もあるとは思うけど、でももう少し知っておいて欲しい。
・それをどういう団体がやっているのか、こういう助けが必要で、それを今支援しているのはこういう団体で、自分達は何ができるのだろうって考えてほしい。

保育士（B氏）の面接内容　　日本人、S保育園での保育歴３年

保育士として大事にしていること

子どもの国籍や背景を大事にしたいと考えている。 日本になじもうとしている外国人が母国のことを思い出せなかったり、日本人が肩身の狭い思いをしないように等、日本人外国人両方の保護者への対応の困難さを実感している。 自分自身も多様な人たちと一緒に生きていくことの大切さを学んでいる。

・いろんな国とか、その子の家庭環境があって、それをすごく大事にしたい。
・やっぱり保護者の人への対応が難しい。無理に引きだそうとすると、日本になじもうなじもうとしている人に、フィリピンのことを教えて下さいって言っても、思い出せないとか、思い出すのに時間がかかる。
・日本の保護者は、多分何もしらなくって保育園に来た人は、なんだここはってびっくりする人がいると思う。外国人のママに、自分の文化を大切にしてもらいたいと思うあまり、日本のことがあまり紹介されなかったりとか、逆に日本人が肩身の狭い思いをしないようにしなければいけないと思っている。

子ども達の将来への願い

S保育園での多文化保育が、子ども達の中に浸透していることがわかった経験がある。 子ども達には、色々な友だちと出会って欲しい、保育園を出ても、自分と異なる人に会ったとき、友だちになりたいと思うような子どもになってもらいたいと思っている。そのときに橋渡しになれるような保育をしたいと考えている。

・おにいちゃんが卒園児の子がいて、その子が学校で「もしどらえもんがいて、ひとつだけ道具をだせるとしたら」っていうところで、「それを飲めば、どんな人でも仲良く暮らせる何かが欲しい」って答えたらしいです。おかあさんが感激し

て、S保育園に入って育って、心の中に植えられた種が咲いたんだなって思ったって。
・自分にできることは限られている。保育園から出てしまえば、手が離れてしまえば、何も関わることもできなくなってしまう。保育園にいる間にいろんな友だちと友だちになってもらいたい。
・種まきをしたいなと思っている。保育園をでたら忘れちゃうかもしれないけど、いつか自分とちょっと違うなって思う友だちにであったときに、ええって思うんじゃなくて、なんか懐かしいとか、友だちになりたいとか、居て当然だと思ってもらいたい。

多文化保育の実績

子ども達も、自分と違う文化や言葉の歌に疑問をもつが、納得できる。S保育園での多文化保育が、子ども達の中に浸透していることがわかった経験がある。お弁当など、習慣のないことはS保育園でも最初は上手く行かなかった。

・おにいちゃんが卒園児の子がいて、その子が学校で「もしどらえもんがいて、ひとつだけ道具をだせるとしたら」っていうところで、「それを飲めば、どんな人でも仲良く暮らせる何かが欲しい」って答えたらしいです。おかあさんが感激して、Sに入って育って、心の中に植えられた種が咲いたんだなって思ったって。
・年長になると「どうして韓国の歌ばっかり歌うの」って言われたことがあります。そのときには「〇〇くんは、韓国から来ていて、韓国の歌を教えてもらったからみんなで一緒に歌おう」っていったり「〇〇くんはフィリピン人だからフィリピンの歌を一緒に歌う」
・一番すごくすぐ文化のことがわかるのは、食事。お母さんの食事に慣れてきている子が、いきなり保育園の食事はなかなか食べれないんですよ。
・まずお弁当が何かわかってもらえない。お弁当の習慣がない国もあるので、前はお弁当箱だけもって来たりしたこともある。特にお弁当については、「おかずの入ったお弁当」っていわないとわからない。

具体的支援

自分の国の文化や食事などをアピールできる場を作ることで、保護者が元気になれる。保護者同士の交流を大切にしており、特に食事などを通じて仲良くなり理解しあえるようにしている。しかし、タイミングを計らないと、保護者が思い出せなかったり負担になったりする。
保育士になって以来、S保育園で働いているので、多言語の園便りも違和感がない。
なんとか保護者に伝えようと、色々な手段を使っている。外部の書類でも読んであげている。外部の施設に一緒に行ったりもしている。お帳面が多言語で作ってあるのが、S保育園の特徴であり、保護者とのコミュニケーション手段でもある。

・特別誕生会の時には、その子の好きな食べ物を出しているんですけど。例えばある国の食べ物とか、おかあさんに教えてもらって出したりとか、バザーの時に〇〇君のママの何々っていうのを出したり、売ったり。それでママがすごく元気になったり。その国のものを紹介してもらったりします。
・保護者は送り迎えの時間帯が違うから、最初は交流がないんですよ。サマーパーティとかで初めて知り合って、一緒にご飯を食べて交流を図って、やっと話すきっかけができて。話すきっかけさえあれば良いと思う。
・保護者の集まりは大事にしている。クリスマスとか運動会とか。うちの保育園の運動会ってお弁当を分け合うんですよ。自分の家のお弁当をいっぱい作って来て分け合って食べるんです。それで一気に仲良くなれるんですよ。そこから、なんで違うんだろうって考えたり理解したりできる。
・自分はこの保育園に来て初めて見た園便りがあれだったから、違和感がないんですよ。
・この保育園だと、いろんな手段を使ってママに伝えようとするじゃないですか。でも小学校とかは、漢字ばっかりの書類とか。わからないから、この保育園で読んで・・・みたいな対応をしています。
・お手紙だけだとわからないので、特に大きなお泊まり会とか。持ち物は、必ずそのママの言葉でわかるように辞書を引き引き、単語だけでもいいから、持ち物だけでもその国の言葉でポスターを書いて、なおかつ説明するとよくわかってくれる。
・ここの保育園の特徴っていったら、お帳面ですね。その国の言葉で書いてあるやつを配っています。それが一番コミュニケーションが取り易い。

外国人と日本人の育児不安の違い

来日当初は気候に戸惑う。育児不安の違いは個別に対応しているので、一概に言えない。育児方針の違いは感じている。
言葉の問題や就学手続きなど、S保育園以外のことで相談を受けている。

・来日してとまどうのは、気候が一番多分あると思う。
・もっとあると思うんだけど、なんだろう。国とかっていうより、その子の育って来た背景もあると思うので、(一概に言えない)。
・育児不安というより、育児方針の違いはあると思います。
・1つは育児不安と言うより就学の手続きがわからないとかはありますね。韓国籍の人は、まず何をしたらよいかわからないとか。
・この保育園だと、いろんな手段を使ってママに伝えようとするじゃないですか。でも小学校とかは、漢字ばっかりの書類

とか。

多文化共生社会と保育

外国人、多文化保育などについては、自治体によって取り組みがまったく異なっている。保育園は園長の方針が影響しやすく、また「日本になじんで」という姿勢の保育園が多く、Ｓ保育園が特別視されていることを問題だと思っている。
自分の名前について、堂々と名乗れる社会になるべきであり、当たり前に言い合える場が必要だと思っている。

・自治体が、外国籍の子が増えているっていうことで、よく使う言葉のパンフレットとか、取り組んでいるところはあります。自治体によって違いますね。
・日本にいるんだから、日本の文化になじんでっていう保育園が多い。
・保育士会で保育園同士の交流があるんです。年長児とか交流するんですけど、Ｓ保育園っていうことで、歌を歌ったり、ゲームとかするんですけど、それをみて「やりたいな」って思ってくれる先生とか「教えて欲しい」っていう先生はいるけど、それを普段の保育に取り入れようという園は少ない。「Ｓだからできるのよね」っていうことが多い。
・他の保育園からしたら、多言語で書いてあってすごいなって思うみたいですね。
・それなりに対応しようとしている保育園も増えてきている。いろんな言葉で言ってみたり、お手紙をお母さんにわかるように書いてみたりとか。
・他の保育園に対して。特別なことをする意識をもたないで。日本人ばっかりなのか不思議なくらいだと思ったほうが
・特に在日の子は日本社会の目があったり、本名隠している子どももいる。いろいろなんだと思うけど、自分には２つ名前があるんだよって、堂々と「本当は日本の名前じゃなくて、韓国人の名前もあるんだよ」って言って当たり前の場があると良いなと思う。
・ちょっとかわった名前だなっていう友だちがいても、それがその子の名前なんだよって当たり前に言い合える場があると良いと思う。

行政や社会への要望

行政や地域についても、言葉の問題を感じており、また「子どもの権利条例」があるにしても、浸透していないと感じている。
外国人にとって、地域のコミュニティがあるのは良いことだと感じている。
本名を当たり前に名乗れる場が必要だと感じている。

・行政はちょっとわからないですけど。ママ達にもうちょっとわかりやすく、簡単な日本語で書いてあるといいと思います。
・コミュニティがあって、そこでグループがあって楽しい活動をしている。そういう自分の居場所があるといいなと思う。
・ちょっとかわった名前だなっていう友だちがいても、それがその子の名前なんだよって当たり前に言い合える場があると良いと思う。

平成14年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

第二回　多民族文化社会における母子保健シンポジウム報告書

第2部　パネルディスカッション　「豊かな多民族文化社会に向けて」全記録

開催日時：　2003年2月23日（日曜日）　午後1時30分～午後6時
場　所　：　東京大学医学部図書館3階　333号室

コーディネーター　中村安秀（大阪大学大学院人間科学研究科　教授）
パネリスト　李　節子（東京女子医科大学大学院看護学研究科　助教授）
宮田廣保（愛知県安城市教育委員会生涯学習課事業係長）
池住　圭（名古屋学生青年センター　総主事）
榎井　緑（とよなか国際交流協会　事業課長）

中村
それでは、シンポジウムをはじめたいとおもいます。私は、このシンポジウムの司会をさせていただきます中村です。よろしくお願いいたします。なお、今回は４名のパネリストの方にお話を頂いて、その後、フロアからいろいろなディスカッションをして行きたいと思います。今回、『豊かな多民族社会に向けて』というテーマでディスカッションいたしますが、私たち自身が研究班で様々の調査を行っている際に、「研究のための研究、調査のための調査はしない。」というのを一つのキーワードにしております。本当に現場で困っている人たちに還元できる研究・調査でなければ意味がない、ということでやってきております。今回は、今までの研究成果に基づき、いろいろな方に参加して頂く形でのパネルディスカッションによって、今後の多民族文化社会における母子保健のあり方についての方向性を浮き彫りにできればいいな、と考えております。
それでは、最初のパネリスト東京女子医科大学看護学部助教授の李節子さんよろしくお願いいたします。

李
よろしくお願いいたします。
私は今回、看護学部の教員という立場から何を社会に提言すべきか、といった点から考えて見ました。社会で見たもの，感じたものを、提言としてまとめて伝えようと思って今日は参りました。プログラムをごらんになればおわかりのように、私自身の名前が李ですので、多民族社会の中のマイノリティの代表の一人としてお話できると思います。
私は、ここ１５年ほど「在日外国人の母子保健」をテーマに活動してきました。この「在日外国人の母子保健」という言葉を、日本の文化の概念の一つとして位置づけるというのが、私の役割の一つであると考えています。

当たり前の言葉になりますが、日本の中では、世界のいろいろな地域のお母さん、お子さんが生まれ、育っています。
在日外国人の母子保健に関する基本的な情報の話に入りますが、日本は今、国際人流の時代になっています。国際化の現状、多民族化している現状を理解するところから、まず始めましょう。
まず、日本における 1947 年からの外国人登録者数の推移です。1947 年というのは、外国人登録令が交付された年です。そのときの在日外国人というのは、9割くらいが在日コリアンの人でした。この人たちは、1910 年代から日本に住んでおりましたので、交付の年はもうすでに2世の時代でした。たとえば、私の祖父は 1910 年代に日本にやってきましたので、私は在日 100 年の人間なんです。こうなると、もう明らかにエイリアンではないですよね。やはり、コリアンジャパニーズだと思います。1980 年代までは、在日外国人といえばコリアンだったんですね。ところが 1980 年代後半になると、日系ブラジル人をはじめとした、いわゆるニューカマーという人たちが一気に増えております。1990 年以降は、約 100 万人程度の外国籍を持つ方々が日本で暮らすようになっております。
注目して頂きたいのは、日本においていわゆる多民族社会の第一世代といえるのは、コリアンですよね。この人たちは今、高齢化社会を迎えておりまして、1991 年以降は年間一万人ずつ減少しております。
私は日本語をぺらぺらと喋っていますが、九州のある大学で特別講義で私が話をしたときに、「李という名前の人が日本語でぺらぺらと喋るからコワい。」という感想がかえってきました。「私は、そんなにコワくないですよ。」と返事したのですが、李という人が日本語を話すということが彼らの頭の中には全くなくて、その後3時間の講義が全然頭に入らなかったそうです。在日コリアンの人が普通に日本にいて、市民として暮らしているんだよということが一人でも多くの方に当たり前にわかって貰いたいと思います。私はどこに行っても、「日本語うまいですね」といわれるんです、困りますね。
在日コリアンは 100 年を迎えるんですが、在日 100 周年のイベントを行おうとも考えているんですが、このスライドを見て下さい。『在日コリアン 100 周年』の写真展のスライドですが、1912 年の高麗丸という船の写真です。釜山から日本へ就航された船です。私は 1958 年に日本で生まれていて、在日の歴史を知っているわけではないし、私の祖父は１６歳で日本に渡ってきましたが、どんな風に渡ってきたのかもよくわからなかったんですね。それで、この船を見ると、「なるほど、こんな風に渡ってきたのか。」と思ったりしました。
さて、国際人流時代と言うときに、絶対にみなさんに覚えておいて頂きたいことがあります。在日外国人が 178 万人日本に住んでいるということは、皆さんはもう何度もお聞きになっていると思います。もう一つのこととして、海外で暮らす日本人、いわゆる海外在留邦人もすごく増えているんですね。皆さんは、海外在留邦人というのは誰を指すかご存じですか？在日外国人のことをやっている方は、外国人のことはよくご存じなようです。一方で、海外在留邦人の定義などは意外に知られていないのですね。海外在留邦人というの

は、長期の海外滞在者と永住者のことを指すのです。長期滞在者の日本人は、1990年以降に2倍に増えているんです。よくマスコミなどで、「外国人が日本で増えた、迷惑だ。」などと書いていますが、日本人もものすごい勢いで海外で暮らすようになっています。現在、過去最高で、約84万人の方が海外で暮らしています。私は日本生まれの3世ですが、同じように日系人、つまりルーツを日本にもって海外で暮らしている人を会わせると200万人います。現在、約200万人の日本人が、海外で暮らして、結婚して、出産しているのですね。そして、だいたい同じような数の200万人の外国人の方が日本で暮らしている。国際化ということを考えるときには、お互いさまと考えないと、一方的な迷惑論で終わってしまうと思います。

今のを整理しますと、日本人の短期滞在も含めた出国者が1,600万人なんですね。日本に帰られる方は500万人，在留邦人は84万人，海外で暮らす日本人は200万人，在日外国人は178万人、こういったデータを見ますと、やはり国際人流時代だなとわかります。皆さんも海外旅行に行かれたり、近所に外国の方が暮らしていたりというのが当たり前の時代になっていると思います。

私も長く研究していて、びっくりしたことがあります。厚生労働省のデータの2001年版を入手してみたんですが、1965年の日本人の国際結婚、日本人のパートナーの国際結婚の割合は0.4%だったんですが、2000年には5%にまでなったんですね。これはどういうことかと言いますと、1965年には日本人の250人に一人しか国際結婚していなかったわけです。ところがいま、20人に一人ですね。また、国際結婚の都道府県割合を見ますと、東京や関東を中心に、ものすごい割合になっています。北海道や九州では1％程度ですが、東京を中心としてホットな多民族社会が進んでいますね。2001年では20人に1人が全国での国際結婚の割合ですが、東京では10人に1人です。国際結婚が当たり前になっている、ということです。こういったこともあまり知られていないので、これを伝えるのが私の役目かと考えています。

1997年の東京都新宿区の、親が外国人の子どものデータを見ますと5人に1人なんですね。あまりにもインパクトの強いデータなので、朝日新聞の一面トップに「東京の赤ちゃん、国際化急ピッチ」ということで出ました。何気ないことなのですが。こういったニュースを作ることが、私の大学の教員としての非常に大きな役割の一つだと思っているんですね。なぜかといいますと、こういった現実を見ると本当に子どもが多様化しているにもかかわらず、ほとんどの方が日本を単一民族国家だと思っていらっしゃるからです。これは、非常に大きな問題だと思っております。

国籍法が改定されていまして国際結婚も増えてきているわけです。現在は父母両系主義と言いまして、お父様かお母様のどちらかが日本人であれば、生まれてくるお子さんも日本人なんですね。そうすると、国際結婚が増えて来ていますので、日本人の子どもの人種が多民族化してきているんです。具体的に言いますと、1997年東京都、お父様が外国人でお母様が日本人の子どもの出生数1433人、お母様が外国人でお父様が日本人の子どもの出生

数 2499 人、併せて 5000 人程度の方の親のルーツを見てみました。この方達は、日本国籍をもつ日本人なわけですが、お母さんを見るとフィリピン人が最も多いんですね。お母様のルーツを、遺伝として持ちますよね。そうすると、日本人であるにも関わらず見た目が外国人なので、「外人、外人」と徹底的ないじめにあったりするわけです。いま、お父さんがアフリカ系のアフロジャパニーズといわれる子ども達が増えているんですが、日本社会が受容しませんので、いつまでも「外人、外人」と言われてしまうわけです。これは本当に子どもの心を傷つけますし、私は何とか、こういったイメージを変えなければ、と思っております。

厚生労働省は、このような多民族化の現状を無視してはいませんで、非常にすばらしい通達を出して下さいました。平成 8 年 5 月 10 日に母子保健強化推進特別事業として、「外国人母子への指導体制の整備事業」というのを大きな推進事業の中で位置づけて、全国の都道府県知事，市長に通達を出しています。これを受けて、かなり現場では変わってきています。もう一つ、すばらしい指針が出ています。厚生労働省の児童・家庭局が出している「保育所保育指針」、全国の保育所でどのような保育をするのかという指針の中にあります。この中で、人間関係の中で、４歳の子どもは外国の人などの異なった人の存在に気づくような人間関係の形成をしなさい、５歳の子どもは異なった文化を持った人に関心をもつようになるような保育をしなさい、６歳になったらその文化を知ろうとするような保育をしなさい、という指針です。

最後に、私がどのような社会であって欲しいか、という話をします。内なる国際化というのは、日本の中での国際化を指すのですが、共生社会、多様性があって色々な人がいて、その人たちが色々と選ぶことの出来る社会、究極には人に優しい社会であって欲しいと思います。このスライドは、お母さんに承諾を得て示すスライドです。この子は、お母様が日本人でお父様がアフロ・アメリカンです。この子は日本生まれで、日本の保育園に行っております。こちらの子は、お父様がパキスタンとマレーシアと中国とコリアンのルーツを持っているんですね。こういった子ども達が、日本で生まれ育って行く中で、少しルーツが違うとか、少し言葉が違うとか、色が違うとかいうだけで、徹底的な暴力を受けたり学校に行けないなどというのは本当に良くない。豊かな多文化共生社会に抗うことだと思います。私はこのことを提言させて頂きたいと思います。ありがとうございました。

中村

ありがとうございました。非常に全般的に、豊かな多民族文化社会へ向けてのメッセージをいただけたと思います。

それでは、続きまして、愛知県安城市教育委員会生涯学習課事業係長の宮田廣保さんにお願いしたいと思います。

宮田

宮田でございます。

愛知県の安城市にて行っている、多言語によるIT講習に関してお話させて頂きます。

まず、平成１３年度の広報の印刷物、IT特集号についてお話を始めます。

まず、外国語の方にわかっていただくために、プログラムの表紙の所に、ポルトガル語，スペイン語，英語，中国語で表示しています。

私どもの地域では。日系ブラジルの方が多いのですが、みなさん日本語はペラペラです。ひらがなも読めます。しかし、漢字は100~200字読めれば相当インテリ、というのが実態です。100~200 字というのは、小学校一年生程度の語学力です。したがって、このようなポルトガル語の表示がないと、パンフレットは捨てられてしまうというのが現状です。そのために、このように四カ国語で表示しているわけです。安城市は人口約１６．５万人で世帯数ですと約5万8000世帯でございまして、この全世帯に４カ国語パンフレットを配布しております。

今回のIT講習会に関しては、いろいろな省庁のからみがございまして、総務省，文部科学省と厚生労働省から補助を頂いております。機器については文部科学省から補助を頂きましてパソコンを整備致しました。平成13年度に関しましては、総務省の方からインターネットの講習を行ってほしいということで、ほぼ全額の補助を頂いて実施いたしました、平成14年度も継続して欲しいというお話を頂きまして、安城市自前で3000万円，総務省より700万円の補助を頂きまして実施を継続した、という経緯でございます。

今回の事業について一番有効だったのは厚生労働省よりの補助金でして、平成 13 年度の1000万円の予算は、４カ国語のテキストの作成，視覚障害の方の点字のテキスト，それから弱視の方への拡大テキスト，そして音声フロッピー導入に使用しました。平成14年度に関しては、マイクロソフトワードの講習に関して四カ国語，点字，弱視用，音声フロッピーのテキスト作成に使用しました。この2年間の実施状況は、受講者一万人，事業総額約2億円ということでございまして、一人あたり約2万円の経費がかかっている、という実態でございます。

外国語コースだけを取り出しますと、受講者約700人，事業総額2800万円でして、一人あたりの経費が約4万円になります。この分はテキスト作成費に大半がかかっておりまして、この分を除くと、一人あたりの経費は一般の人とほぼ同額でございます。

我々が講習会を行いまして一番苦労したのは、スタッフの確保です。日本人のコーディネーターを一名雇用しました。

講師でいいますと、男性4人，女性14名でした。講師は女性の方が、評判が良いようです。子どもさんや若い男性が、たくさん来てくれました。国籍別でいいますと、日本人が4名，外国人が14名でした。インターネットやワードなどの専門的な講習になりますと、やはり流暢な外国語が必要になります。テキストは外国語でありますが、やはりネイティブの外国語でないと流暢に話しが進まない、ということでネイティブの人を採用しました。言語

別では、ポルトガル語が４名、これはブラジル人の全員女性です。スペイン語については、人口の多いペルー人から７名、男性３名と女性４名です。中国語については、中国人女性２名に日本人女性１名。ただ、日本人女性は 1 歳から 22 歳まで中国で育った方で、NHK の中国語講座の講師もされていた方です。ですから、とても流暢で綺麗な中国語を話されます。英語に関しては、フィリピン人女性 1 名と日本人女性 2 名。フィリピン人女性の方は、フィリピンの国立教育大学の英語科を卒業されたかたで、英語もタガログ語の会話もできます。日本人女性の２名に関しては、教育大学で外国人に日本語を教える勉強をしている学生です。

つづきまして、IT 講習会の外国語コースの受講者の推移です。平成 12 年度には、中高年のパソコン教室というのを 300 名ほど募集しましたが、日本語での募集でしたので全く応募はありませんでした。平成 13 年の前期ですが、先ほどのように外国語の表記を書いたものですから、97 名の応募がありました。この時は、講習はまだ、日本語で行っていました。そして、同時通訳を受講者の隣に配置するという方法でした。それからだんだんと、口コミや外国語の新聞に載ったりして、平成 13 年度後期からはだんだんと受講者が多くなりました。これで同時通訳では対応できなくなりまして、母国語での対応が必要になりました。何度も講習を聞いていて、自分で翻訳をした人たちが、母国語で講習を出来るという形になりました。平成 14 年に入りまして、６～８月の期間だけで、前年度一年分とほぼ同じ 248 名が受講できました。厚生労働省の補助金を頂いてのワード講習は 9 月から 11 月の末までですが、ここでも 235 名でした。実はこの時期は催し物の非常に多い時期でして、安城市文化センターが、様々の催し物に全館貸し出ししていた時期です。これがなかったら、実質的にはもっと受講者が増えていただろうと予測されます。まさに、うなぎのぼりに増えていったということです。

言語別の内容ですが、安城市には 3,700 人の外国人の登録の方がおります。2,400 人がポルトガル語の日系ブラジルの方です。したがって、受講者の言語別と人口分布もだいたい一致しております。

男女別の比率は、ほぼ同数です。年齢は、36~37 歳くらいのちょうど働き盛りの方達です。在日年数はだいたい 10 年。ですから、家庭をもって、安定して、働き盛りの方、ということがいえると思います。それから、始めて見てわかったことですが、出稼ぎ外国人の中では、相当優秀な人が集まってきている。色々話をきいてみたら、母国ではお医者さんだったとか、獣医とか、エンジニアとか、教師とか、そういった人たちが集まって来ていました。

授業風景のスライドです。正面で若い女性の講師がパソコン画面を操作して、それが大きなスクリーンに映ります。受講者は机のパソコンの前に座って受けます。脇に立っているアシスタントも、同じ言語が対応できる人にお願いしています。

口座終了後に、４カ国語に翻訳したアンケートをとりました。理解度に関しては、「よくわかった。」「わかった。」で 98%。「わからなかった。」という人は、一人もいませんでした。

母国語で行えた結果でした。「仕事に役立つと思うか？」という点では85~86%の人々が「役立つと思う。」という結果でした。授業に関する感想では、「不満足」という人は一人もいませんでした。「満足」「大満足」で95%もありました。
平成14年12月1日に、牛島先生，李先生が見学に来られて、私たちをご指導下さった時のスライドです。ごらんのように、子どもも一緒にいます。我々の授業の特徴として、家族連れ，子ども連れで授業を受けるというのがよくあります。というのは、「お父さんお母さんが日本語が不自由な場合に、子どもを通訳として使って下さい。」と通知を出したからです。理由としては、親のIT講習の時に子どもが一人で待っているのは寂しいだろう、というのもありますし、家族中で講習を受ければ参加が多くなるだろう、という気持ちもありました。これが、結果として大正解でした。
まとめになりますが、この外国語講習会が成功している背景には、国，県，市からの適切な予算配分というがあった、ということがあります。母国語のテキスト作成が出来ました。ネイティブのインストラクターの雇用も出来ました。それから場所も機器もよく、受講料も安かったということです。安城市の文化センターというのは、市の中では一番便利な所にあります。公共交通機関からも近くて、駐車場も十分にあります。そして、その頃としては最新型のパソコンを一人一台用意して学習ができる、ということと、外国語で出来たテキストがついて、1,000円ということで受講ができるということがあります。日程も、土日しか受講できないということがありますので、春，夏，秋の土日に会場を開けました。愛知県内の在住者であれば、どこから来てもいいですよ、ということで行いました。年齢制限もほとんどありませんでした。多面的なPRということでは、新聞報道などの他に、彼らがよく出入りする店にパンフレットを置きました。教会や名古屋の国際センター等にも配布しました。関係方面から連絡をもらえるように、外国人の代表者にも送りました。これらの成果が出たと思います。
結果として、みんなに愛される講習会になりました。多数が参加し、講習は楽しい。非常に楽しい講習会です。それから、役に立つ。仕事の上で、仕事を探す上で非常に役に立つ。それから、満足できる。もっと講習をしたい、という要望もありました。IT講習だけでなく、母国語で多面的な教育を一緒にして欲しい、という要望もありました。
以上でございます。ご静聴ありがとうございました。

中村
どうもありがとうございました。
宮田さんは、安城市の教育委員会の方ですが、同じ安城市の外国人相談員として今回参加いただいた鈴木隆俊さんにも、すこし、お話いただきたいと思います。同じ活動について、NGOといいますか、外国人相談員の立場からお話いただきたいと思います。

鈴木
私は、トヨタの中央研究所で車の研究を30年していまして、本来こういったことにはあまり関係のない人間です。そういう私ですが、宮田さんのもとで、外国語の4カ国語のテキストを翻訳作成するときの監修を行いました。もう一つは、講習会を行う際の、外国人のインストラクターとアシスタントを束ねる役目をしました。それで感じたことを、NPOと行政ということで言います。市がNPOに頼むと安くできる。ボランティアとのリンクがあるから、安く出来るというのが一番のメリットです。反対に、NPOは、発展途上の団体であると、組織的な活動が十分に出来ないことがある。一般の企業では考えられないようなことが起きる。つまり、専従者は理解できるが、あとの人はボランティアなので、連携が難しいことがある。ここの所をきめ細やかにやっておかないと、後で大変なことがある。一言で言えば、NPOを上手にお使いになればお得ですよ、ということです。

中村
どうもありがとうございました。
鈴木さんはご自身で何十も特許を持っていらっしゃる技術者で、一方でこういった活動に関わっておられるというのが非常に印象的でした。
それでは次に、名古屋学生青年センターの総主事をなさっておられます池住圭さんにお願いいたします。

池住
こんにちは、池住でございます。
プログラムには、名古屋学生青年センターと書いてございますが、今日は、名古屋学生青年センターが主催致しております『国際子ども学校』についてご紹介したいと思います。
先ほど、李さんからお話がありましたが、今、本当に多民族化しています。私たちの地域、名古屋にも、本当にたくさんの国の方が働きに来ています。そして、滞在が長期化しております。長期化する滞在の中で、日本で生まれ育つ子ども達がたくさんいます。本日、横尾さんという方と名古屋から一緒に来ましたが、彼は、『ジュビリー2000子どもキャンペーン』というのを立ち上げて、外国人の子ども達の状況を調査しました。そのときに、東海地方で600人の子ども達に個別に面談をしたのですが、そのうちの152名が無国籍状態にある子ども達でした。国際子ども学校は、そのような無国籍状態にある子ども達の学校です。愛知県は、残念ながら、原則として外国人登録のない子ども達の就学は認めておりません。
名古屋には、大きなフィリピン人のコミュニティーがあります。シングルマザーが、一生懸命に子どもを育てています。お父さん、お母さんが日本に働きに来て、結婚をして子どもが生まれます。私たちの学校に来た子ども達の中で、一番大きな子はもう、17歳になりました。今来ている子ども達の中で、一番ちっちゃいのは4歳です。子ども学校は、月曜

から金曜まで、午前10時から午後2時半まで、お弁当をはさんで4時間、国語，算数，理科，社会，タガログ語，英語，音楽。それから、フィリピンはキリスト教国ですから、キリスト教の宗教の時間もあります。そういう学校を、ほそぼそと続けております。
学校を作ったのは1998年の4月です。来た子ども達は、とっても喜んでいました。
なぜか？　その子ども達には、それまで、居場所がなかったんです。学校に行きたくても行かれない。　お外に出ると、よそのおばちゃんが、「どうして学校に行かないの？」っていうし、家にいるとお父さんお母さんが「静かにしなさい」って言うし、学校に行って発散すること、学校の友達といろんなことをすること、そんな事が全くなかったので、非常に荒れていました。
学校が始まった時に、私たちが直面した一番大きな困難なことは、子ども達の言語が確立出来ていない、ということでした。アイデンティティが確立されていない、ということでした。それは、子ども達がこの地域で生まれ育っているにも関わらず、私たちが認めて来なかったからです。外に出れば、「あんた何人？」　でも、その子達は、日本で生まれ育っているんです。その子ども達にとって、日本は、私たちの地域は、自分の国、自分の地域なんです。ですから、先ほどから、外国人，外国人の子ども，という言葉で語られて忌ますけれども、子ども達にとっては日本が自分の祖国なんです。ですから、外国人ではないんです。そういう状況の中で、子ども達は非常に不安定な生活をしています。一つは、親たちが、この不況の中で十分生活の糧を得ることが出来ないで生活している。そして、子ども達が無国籍状態であるという中で、非常に不安定な生活をしています。精神的に非常に大きな負荷を抱えて生活しています。
一つ例を申し上げましょう。小さな子ども達は電車で移動することができないので、教師の一人がマイクロバスで連れてきます。道を走っているときに、子ども達は、突然窓から顔を隠します。外に警察官を見つけたときなんです。とっても屈託なく生活していますけれども、そんなことをず～っと心の中で抱えながら生きているわけです。そしてもう一つ、子ども達が直面している大きな問題があります。健康の問題です。子ども達は、無国籍という状態の中で、健康保険も与えられずに、全く教育だけでなく医療面も含めた社会サービスが受けられない中で生活しています。子ども達がどこから来ようと、子どもも達は私たちの社会の中で生まれ育っているのです。今日のパネルディスカッションの中で、本当に残念な子ども達とどうやって生活していったらいいのか、一緒に考えられたらいいと思います。後で、『外国人の子どもの教育と人権ネットワーク』、そして、『国際子ども学校』を支援する会の活発なメンバーである横尾さんからお話を頂いて、ご報告を終わろうと思います。

////ビデオ供覧////
日本には、国籍のない子ども達がいます。
不法滞在となっている親たちが強制送還となることをおそれて、子どもの外国人登録をだ